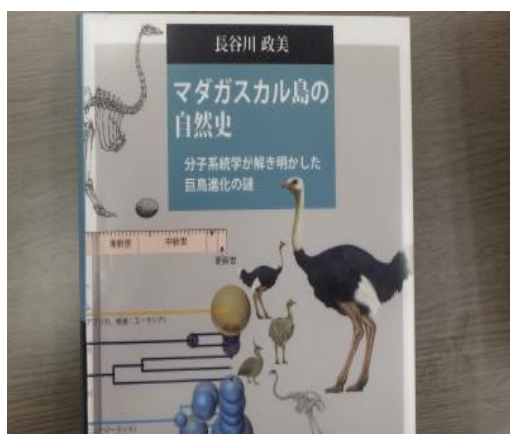


2019.01.21

科学することの魅力

2冊の本を読む機会があった。長谷川正巳著「マダガスカル島の自然史」(海鳴社)と海に魅せられた北大の研究者たち著「海をまるごとサイエンス」(KAIBUNNDO)である。

前者は、マダガスカル島独特の動植物相がどのように生み出されてきたのかを、DNA塩基配列の置換を統計的に調べる分子系統樹推定の手法を用いて、この謎解きにアプローチしたものである。後者は、北大水産学部で教鞭をとる研究者が中心となって水産科学の魅力を語る研究活動の内容が紹介されている。ライブ感、ワクワク感をたっぷり感じ取ることが出来た。



2018.12.29

ナチュラリスト

福岡伸一著「ナチュラリスト 生命を愛でる人」(新潮社)を読む機会があった。「生命とは何か」を追求してきた著者が、「ナチュラリスト」のことを、シンプルに「自然を愛する人」と解しています。何も特別な存在ではなく、必ずしも職業的なものとも言えないとも述べています。自然に驚き、その美しさに触れて、言葉にする。誰にでもあるセンス・オブ・ワンダーである。



2018.12.06

オランウータン

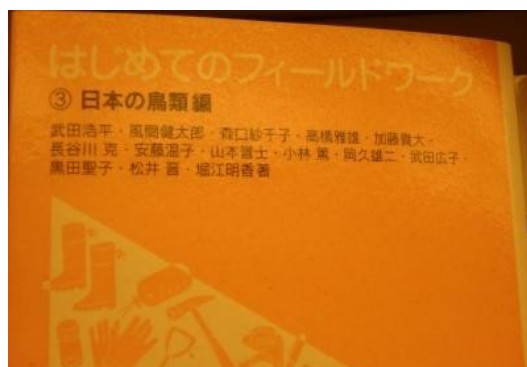
久世濃子著「オランウータン」(東京大学出版会)を読む機会があった。「森の哲人」を研究対象に、これまでに取り組んできた道のりが理解できた。研究対象やテーマの選択は、人との出会い、偶然によることも理解できた。子育てしながらボルネオでのフィールドワーク、執筆活動は大変だったに違いない。読み終わって「森の哲人」の魅力が伝わってきた。



2018.12.04

若手の鳥類学者の志

はじめてのフィールドワーク 日本の鳥類編(東海大学出版部)を読む機会があった。毎回楽しみにしているシリーズ本の新刊。14名の若手鳥類研究者の誕生とこれまでの研究内容が綴られている。いずれの研究者に共通しているのは、幼少期に動物と触れ合っていること、とくに鳥類との出会いがあった。原風景が今日の研究につながっていることが、読んでいて良く理解できた。

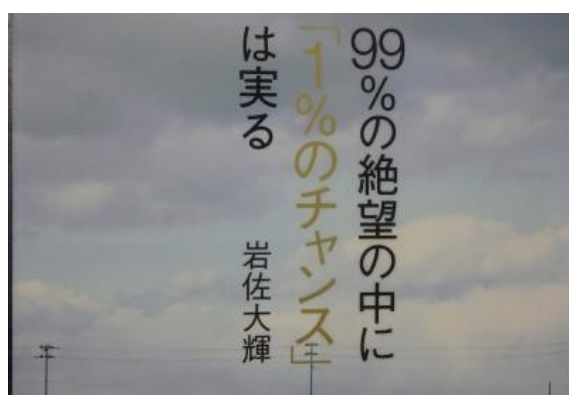


2018.11.25

99%の絶望の中に「1%のチャンス」は実る

岩佐大輝著「99%の絶望の中に「1%のチャンス」は実る」(ダイヤモンド社)を読む機会があった。あの日、瓦礫だった場所には、いま最先端のイチゴ農場が立っている。東北大震災後に特定非営利活動法人 GRA および農業生産法人 GRA を設立。先端施設園芸を軸とした「東北の再創造」をライフワークに、故郷のイチゴビジネスに構造変革をおこし、地域をブランド化。ひと粒 1000 円で売れる「ミガキイチゴ」を生み出す。

表題を含め、本書の中に有益なキャッチコピーや考えさせるフレーズが織り込まれており、説得力のある内容であった。



2018.11.25

フタバスズキリュウ もう1つの物語

古生物学者の佐藤たまき著「フタバスズキリュウ もう1つの物語」(ブックマン社)を読む機会があった。恐竜博士を夢見た幼いころ。首長竜と出会い、夢中になった日々。駆け出しの研究者時代。2016 年猿橋賞を受賞した一研究者のフタバスズキリュウにかける夢と志。情熱ある語り口に、思わず引き込まれてしまった。

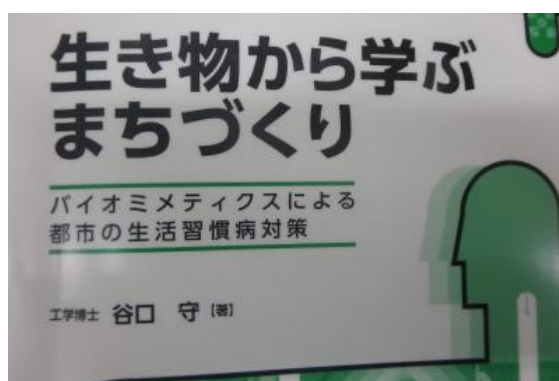


2018.11.12

生き物から学ぶまちづくり

谷口守著「生き物から学ぶまちづくり」を読む機会があった。都市は生き物であることを考えさせられた。

生きものと都市は、確かによく似ている。道路は血管、住宅は1つ1つの細胞であることなど。都市を生命体として見ていくと、老化や生活習慣病に相当する不都合が生じていることなど、考えさせられることが多かった。



2018.11.12

ライチョウを絶滅から守る

中村浩志・小林篤著「ライチョウを絶滅から守る」を読む機会があった。兩人とも鳥類学者であり、現在、年間80日間ほど山の上で過ごし、ライチョウの生息地で環境省が推進する保護活動に取り組んでいる。本を読んで驚いたことがいくつもあった。ライチョウが現在多くの問題を抱えている。ニホンジカ、ニホンザル、イノシシといった大型草食動物の高山帯への侵入とお花畑の食害、ハシブトガラスやチョウゲンボウなどのライチョウの捕食者の存在。なかでもグラビア写真のサルがライチョウのヒナを捉えようとする場面を見たときは、絶句した。様々な思いと高山に生息するライチョウの今後について考えさせられた。



2018.09.05

ニホンヤマネ

人生は選択の連続である。選択の中には、偶然というものもあるだろう。あとから考えてみたら必然的だったのかもしれないと思われることがある。湊秋作著「ニホンヤマネ」（東京大学出版会）を読んで、このようなことを考えた。

著者は、大学時代の恩師の影響からニホンヤマネの研究を始めることになる。卒業後の小学校教員時代にもニホンヤマネの継続研究調査を重ね、学位を取得、ヤマネミュージアムの館長を務め、現在は関西学院大学教授として活躍されている。内容的は、副題にもあるように野生動物の保全と環境教育として読みとることが出来、著者のライフストーリーが良く理解できる1冊であった。

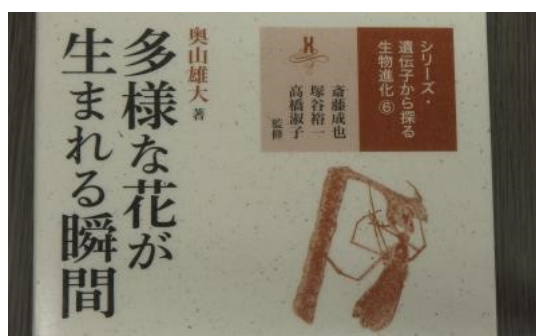


2018.09.05

多様な花が生まれる瞬間

奥山雄大著「多様な花が生まれる瞬間」（慶応大学出版会）を読む機会があった。

動物とつながる生き物は多種多様である。この多様な動物とのかかわりは、どのようにして生じたのか。それを明らかにすれば、植物という生き物が、なぜこのような多様な種に分化し、地球上に広がっているのか、その不思議に迫れるかもしれないと著者は述べている。研究者として生まれる瞬間を読み取ることが出来た。



2018.05.06

この宇宙の片隅に

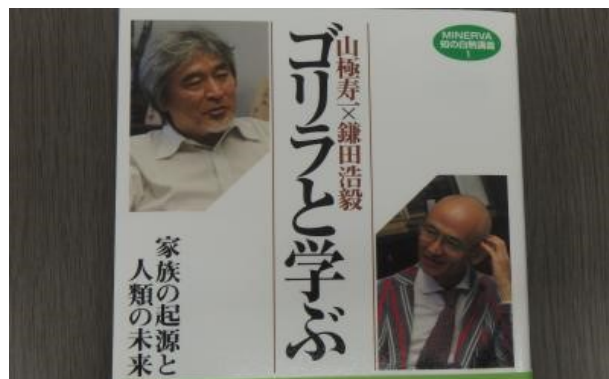
連休後半に「THE BIG PICTURE この宇宙の片隅に」(Sean Carroll, 青土社)を読む機会があった。読後感。宇宙の始まりから生命の意味を改めて考える良い機会となった。何しろボリュームのある内容であった。始まりの終わり。終わりの始まり。時間と空間の関数。私たちは、何処から来て、どこへ向かっているのか。それよりも宇宙の空間構造と機能をもっと知りたくなってきた。宇宙の中から見れば、一個人の存在はちっぽけである。しかし、だからこそ日々の生活を大切に生きて、宇宙の歴史と生命に思いを馳せていきたいと考えさせられた。



2018.05.02

ゴリラと学ぶ

連休前半に「ゴリラと学ぶ」(山極寿一×鎌田浩樹、ミネルバ書房)を読む機会があった。この本は、「知の白熱講義」シリーズとして刊行された1冊である。現在、京大総長である山極氏はゴリラの研究者としても著名である。一方、火山学者である鎌田氏は、京大生たちに知的好奇心をよみがえらせる講義を行っていることでも著名である(以前このブログにおいて鎌田氏の本を紹介したことがある)。2人のトークから、人の生のおもしろさ、人が出合い、面と向かって語り合うことで起こる知の化学反応の成果を読み取ることが出来た。

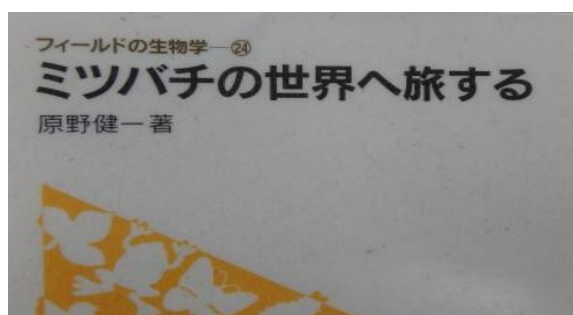


2018.02.05

ミツバチの世界へ旅する

フィールドの生物学②④の近刊「ミツバチの世界を旅する」(原野健一著、東海大学出版部)を読む機会があった。

著者はとくにミツバチに関心があったわけではなく、むしろ偶然が重なって、この研究対象に出会ったと本の中で述べている。大学・大学院の選択、指導教授との出会いと影響、いくつもの偶然が重なって現在の研究につながるストーリーである。このシリーズの面白い所は、研究対象とする生き物だけではなく、その対象とどのように出会い、どのように育まれてきたかを知ることが出来る点だ。ここから学ぶことは多いし、1人の研究者が成り立つまでのライフヒストリーについて考える機会を与えてくれる。



2018.01.16

君たちはどう生きるか

年始に3冊の本を読んだ。

1冊目は、吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」(マガジンハウス)。2冊目は「牧野富太郎 植物博士の人生図鑑」(平凡社)。3冊目は、増井真那著「世界は変形菌でいっぱいだ」(朝日出版社)。

吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」は、貧困、いじめ、勇気、学問とは・・・等々、古くて新しいテーマに人間としてどう向き合うべきか。この本は、1937年に発行されました。今、時代を超えて新装版で発行されたものであり、漫画化も同時発売となっている。この歴史的名著が、多くの読者を引きつけている。良いものは、歴史に残る。残るだけではなく、読み継がれていく。大学生にもお勧めしたい本である。



2018.01.16

植物博士の人生図鑑

日本の植物分類学の父と言え牧野富太郎。94年の生涯を植物採集・観察に明け暮れ、その足跡はこれまでも語り継がれ、多くの著書がでている。

牧野富太郎—植物博士の人生図鑑（平凡社）は、豊かな言葉とスケッチ、写真で綴るビジュアル版の自叙伝であり、新たな発見もあった。改めてすごい人だと感じた。



2018.01.16

世界は変形菌でいっぱいだ

著者は16歳。変形菌と10年間一緒に暮らした生活と研究の記録である。5歳の時に変形菌と出会う。その後、菌類研究者との出会いが、その後の人生の歩みを決めた。

豊富な記録とカラー写真が読者を引き付ける。受賞多数。研究発表の他、講演・観察会などに力を注いでいる。人は、何かのきっかけを元に大きく成長していく。教えられることの多い一冊であった。

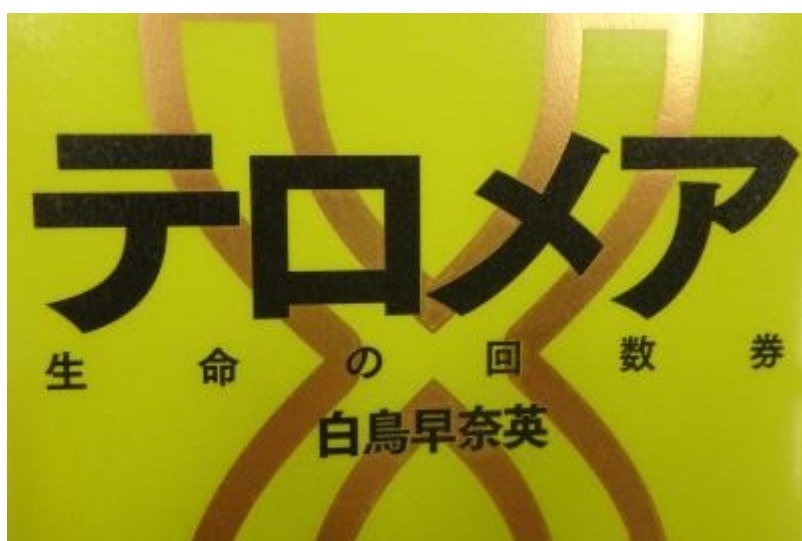


2017.12.06

テロメア

表題の本「テロメア」(白鳥早奈英著)を読んだ。

テロメアは細胞の遺伝情報がある染色体末端にあり、細胞が分裂するたびにテロメアは短くなる。ヒトの場合、約 50 回の細胞分裂でテロメアの量が尽き、寿命も終わりを遂げるといわれている。この本では、テロメアの消費を防ぐ 1 つの方法として酵素を有効に摂取することを提案している。日常生活の中に酵素食品を取り入れて、いつまでも健康で長生きな日々を過ごしたいと考えた。酵素メニューと効能は、大変参考になった。

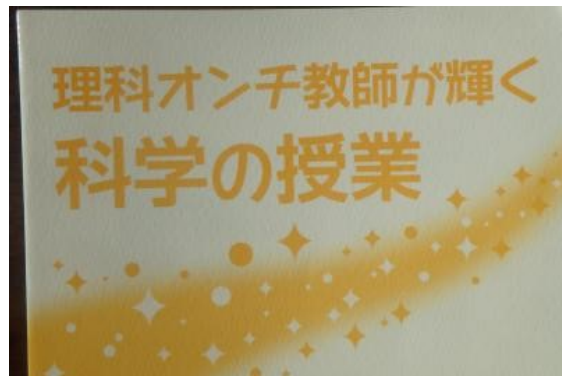


2017.11.20

このような本がもっとあれば・・・

2 冊の本からサイエンスの発想を新たに学んだ。「京都大学アイデアがわいてくる講義」(上杉志成著)、「理科オンチ教師が輝く科学の授業」(板倉聖宣・堀江晴美著)。

前者は、著者が自らの学生時代につまらなかった授業をふりかえって、現代の学生たちに自ら面白いことやワクワク感を熱く語る授業内容で、学生(または読者)の立場に立った臨場感のあるものであった。後者は、著書の中で、理科オンチとは、「まだ科学が自分の心の中に存在していない人たち」だといっています。さらに「楽しく分かるということではなければ本当にわかっているとは言えないと思う」とも述べています。心あたる教師たちは、きっと多く存在すると思った。

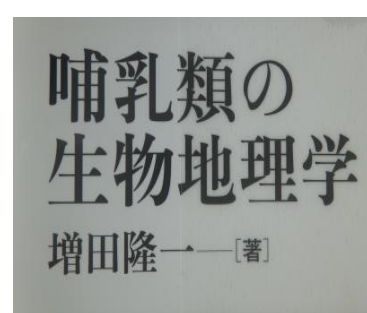
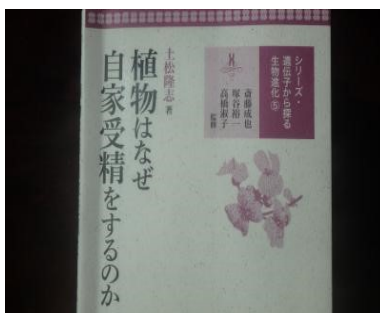


2017.11.16

旅する知の探究

学問を「広く深く」極めた読み応えのある3冊の本を読んだ。1.「植物はなぜ自家受精するのか」(土松隆志著、慶応大学出版会)、2.「化石の植物学」(西田治文著、東京大学出版会)、3.「哺乳類の生物地理学」(増田隆一著、東京大学出版会)。

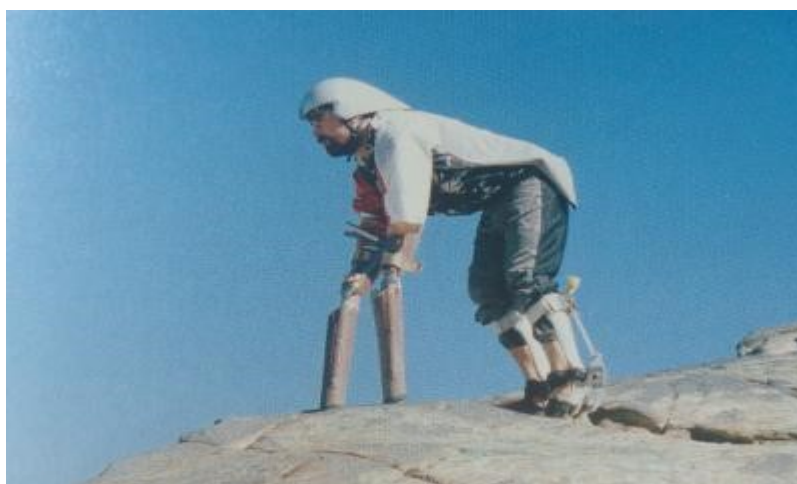
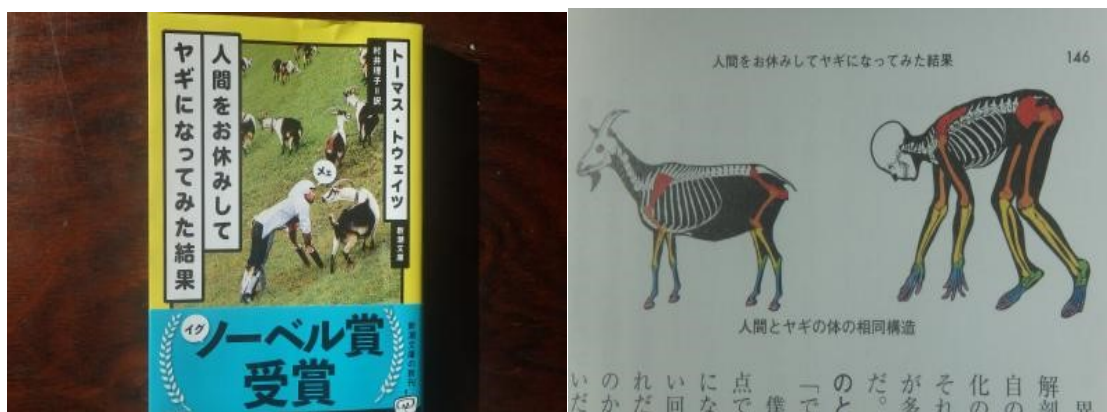
1は遺伝子から探る生物進化のシリーズ⑤で、自家不和合性と自殖の研究の過程をまとめたものである。2は、単に化石の植物だけではなく、他分野とかがわりのある総合的な研究であることが読み取れた。3は、DNAや遺伝子から見た哺乳類学として読むことが出来た。いずれの本も時空間を旅する知的な探究であり、これまでとは違った切り口で読み進むことが出来、充実したひと時を過ごすことが出来た。感謝。



2017.11.16

人間をお休みしてヤギになってみた結果

一昔前、研究者が対象とする動物にのめりこんでいくと、その動物の顔に似てくるという話をよく聞くことがあった。これは褒め言葉である。確かに身の回りに思い当たる人たちがいた。本の題名にひかれて表題の本を読んだ。世の中にこのような人がいることに驚きと羨望。イグ・ノーベル賞を受賞しただけあって爆笑実験の数々。半端ではない。ヤギに限りなく近づこうとした試みと努力には頭が下がる。久しぶりに面白い本に出合った。



2017.09.18

賢く生きるより辛抱強いバカになれ

稲盛和夫と山中伸弥の対談「賢く生きるより辛抱強いバカになれ」を読んだ。稲盛氏は、京セラ、KDDI を創業、JAL を再建した経営の神様。山中氏は iPS 細胞を開発したノーベル賞学者。2人には共通点があった。理系出身、父親は工場経営者、挫折と回り道を繰り返した半生……。

人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力の方程式に納得した。稲盛氏いわく、一番大事なのがその人が持っている人生や仕事に対する「考え方」。次に「熱意」。能力は3番目。考え方はマイナス100点からプラス100点まで。熱意と能力は0点から100点まで。仕事の結果はこの3つの積となる。周囲を見渡してみると納得。研究・教育を志す私たちの戒めとして考えた。

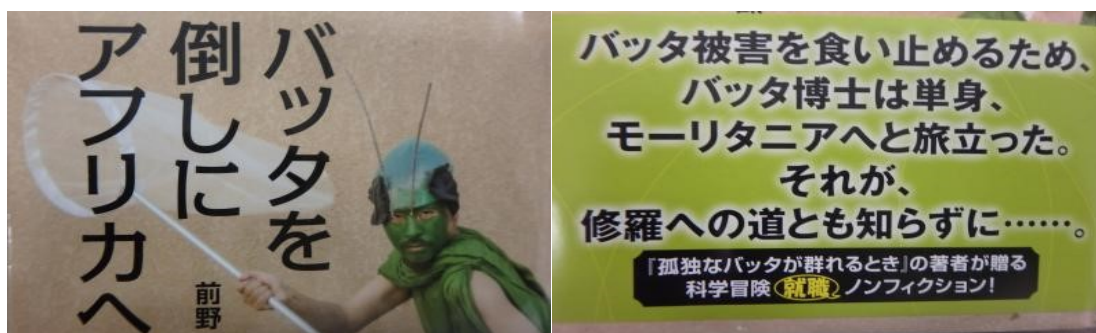


2017.07.09

バッタを倒しにアフリカへ

前野ウルド浩太郎著「バッタを倒しにアフリカへ」（光文社新書）を読んだ。前著「孤独なバッタが群れるときーサバクトビバッタの相変異と大発生」（東海大学出版会）の記憶があり、印象に刻みこまれていた。

著者はアフリカで大発生し、農作物を食い荒らすサバクトビバッタの防除技術の開発に従事するバッタ博士である。子供のころから「バッタに食べられたい」夢をかなえるため、西アフリカ・モーリタニアに乗り込み、バッタと大人の事情を相手に繰り広げた日々をつづっている。読みごたえのある一冊であった。



2017.06.29

旅人

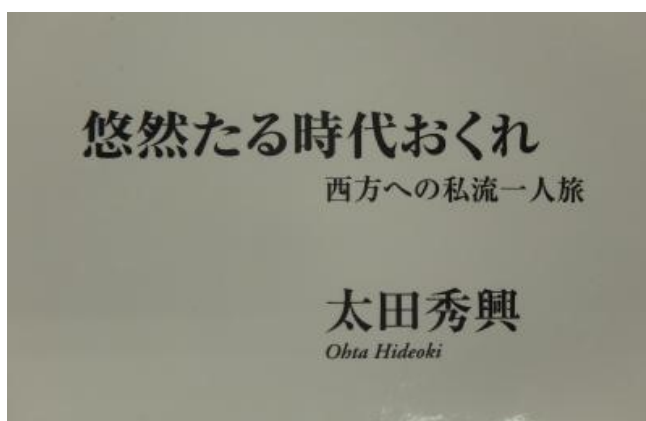
旅に関する5冊の本を読んだ。先ず3冊の旅の本から。

いずれも年月を経てから理解できる旅の内容であった。

湯川秀樹著「旅人 ある物理学者の回想」(角川学芸出版)、玉村豊男著「旅の流儀」(中公新書)、太田秀興著「悠然たる時代おくれ」(小学館スクウェア)。

1冊目は著名な物理学者が50歳の時に回想した湯川(小川)秀樹とその周辺について記されている。三高時代の数学の成績が不合格となる。先生の証明のしかたと違うからという理由であった(別の解き方をして証明の仕方は間違っていなかった)。若き学徒が数学の道から追い出したのは、この時の先生の採点の仕方だった。数学者には絶対になるまいと決心した。運命のいたずらともいうべきか。

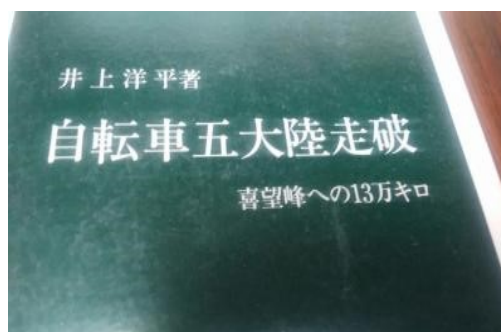
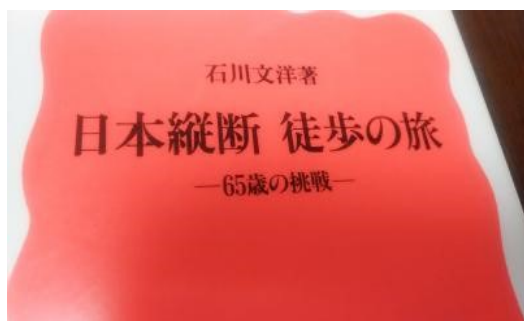
2冊目は、若き日の海外放浪以来、数多くの旅をしてきた著者が、ためになる失敗談などを披露。3冊目は、どうして「悠然たる時代遅れ」なのかから始まり、国内外の旅を元に、絶えず振り返ることを重ねながら時代と向き合っていることが読み取れた。学ぶこと、考えることの多い5冊の旅の本であった。



2017.06.29

徒歩、自転車の旅

徒歩と自転車の旅は、自らの肉体と精神の協働作業によるもので、自動車や新幹線による旅では味わえない魅力がある。石川文洋著「日本縦断 徒歩の旅—65歳の旅」(岩波新書)、井上洋平著「自転車五大陸走破 喜望峰への13万キロ」(中公新書)を読んだ。前者は、歩くことの好きなカメラマンが北海道・宗谷岬から沖縄・那覇まで3300キロ、五ヶ月に及ぶ旅の記録。後者は、六年半自転車による世界一周の旅の記録である。歩いてみないとわからない光景があり、人との出会いがある。その過程の苦労や葛藤は半端ではない。旅をする時間の流れは、当人でしか味わえないであろう。



2017.05.07

先生は教えてくれない大学のトリセツ

ゴールデンウィークには、多くの本を読む機会があった。本の題目に惹かれて「先生は教えてくれない大学のトリセツ」(田中研之輔, ちくまプリマー新書)を本屋の棚で見かけ手にした。著者は、これまで9年間9つの大学で講義を持ち、3000人以上の学生に出会ってきた経験をもとに、この本を執筆。現在、法政大学准教授。

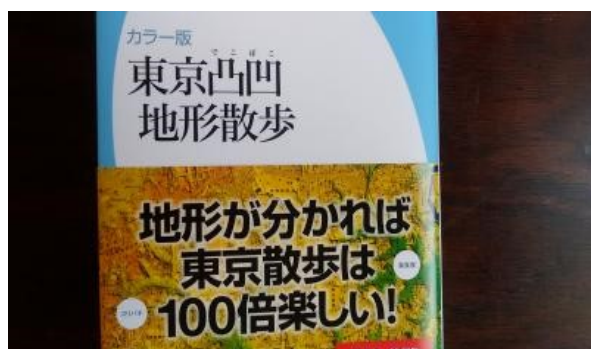
本書のメッセージは、大学の学びを自分たちのできるところから充実させていこうということと、そのまなびは大学時代に限ったものではないことも強調しています。

学生のみならず、大学に関わる教職員にも参考になる本であった。

2017.05.07

東京凸凹地形散歩

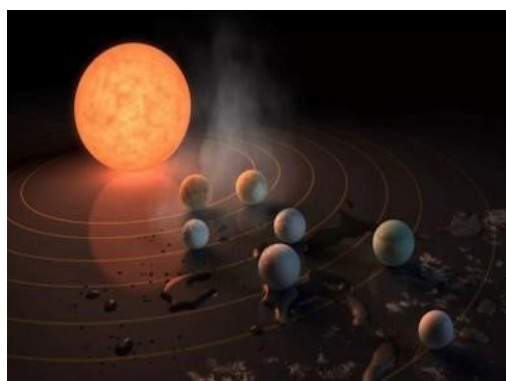
この本(今尾恵介著, 平凡社新書)は、東京の地形が変化に富んでいることを教えてくれる。東京23区の地形は、主に台地と低地で成り立っており、台地が西部、東部が低地なので「西高東低」なのだそうだ。東京の地形を楽しむばかりでなく、散歩する時の豆知識としても読みごたえのある本であった。大学生活をはじめたばかりの新入生のみならず、これから都内を散歩する人たちのためにも有益である。



2017.05.07

我々はどこからきたのか 我々は何者か 我々はどこへいくのか

この言葉は、フランスの画家ポール・ゴーギャンが1897年から1898年にかけて描いた絵画。ゴーギャンの作品のうち、最も有名な絵画の一つとされている。「系外惑星と太陽系」(井田茂, 岩波新書)を読んで、この言葉思い浮かべた。系外惑星とは、太陽系以外の惑星のこと。2016年には、海を持つかもしれない地球サイズの惑星が発見されている。太陽からの距離はわずか4.24光年。海を持っていけば、そこに生命が生息している可能性がある。なので、そういう惑星を「ハビタブル惑星」(居住可能な惑星)と呼ぶこともあるそうだ。



2017.03.31

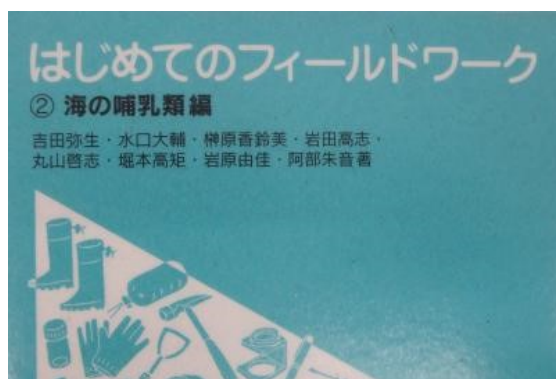
過去・現在・将来の夢

「はじめてのフィールドワーク」②海の哺乳類編(東海大学出版会)を読む機会があった。8人の若手研究者が、海の哺乳類を対象にフィールド調査をした記録である。どの研究者のフィールド調査においても臨場感があり、わくわくしながら読み進むことができ楽しめた。本の中で、主にイルカの音声行動を研究している吉田弥生博士は、紆余曲折を経て現在に至るまでの将来の夢を以下のように描いている。

お花屋さんになりたい (小学校2年生)
お習字の先生になりたい (小学校3年生)
水泳の選手になりたい (小学校4年生)
パティシエになりたい (高校1年生)
イルカの調教師になりたい (高校2年生)
水棲動物の獣医になりたい (高校3年生)
.....
海洋哺乳類学者 (2017年現在)

誰しもが子供のころから、将来なりたい仕事の夢を抱きながら歩み続けている。人は環境や教育の影響を受けながら進路選択をしている。人生は選択の連続でもある。

未分化な状態からどのように分化していくのだろうか。夢を追いかけながら、充実した大学生活を送り、各自の夢の実現に向けて一歩でも前進していくことを願っている。



2017.03.16

どこから来て、どこへ行くのか

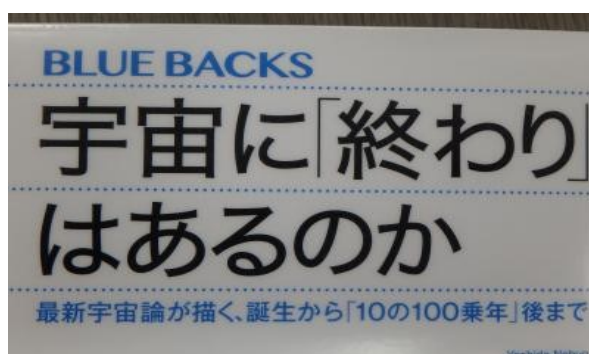
来し方、行く末を考えた。といっても、宇宙の話である。

吉田伸夫著「宇宙に終わりはあるのか」を読んだ。

著者は、はじめにの部分で、次のように述べる。われわれ人類は、混沌から静寂に向かう宇宙史の中で、凝集と拡散が拮抗し複雑な構造の形成が可能になった刹那に生まれた、儂い命に過ぎない。

宇宙が存在することと活動することとは別物である。本書を通して、宇宙の生と死を読み取ることが出来た。

著者の「はじめから始めて、終わるところまで終わらない」叙述を通じて、想像を絶する宇宙の巨大さと、ちっぽけな存在であるにもかかわらず宇宙の全貌を知ろうとする人間の気骨を、実感することが出来た。



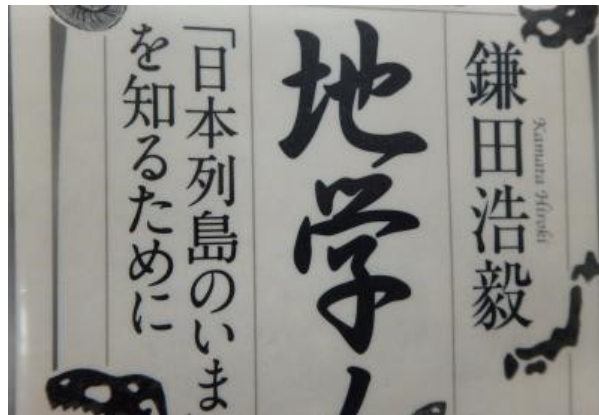
2017.03.14

おもしろくタメになる

京都大学で教鞭をとる鎌田浩毅教授担当の「地球科学入門」講義は、立ち見が出るまでになったということが、著者の「地学ノススメ」(BLUE BACKS)のはじめの部分に記載されている。

本書はこのときの経験を活かして、地学の素人の方々にもわかるように平易に、かつ身近な話題を用いて「地学の全体像」が理解できるように組み立てられている。

地学は、われわれ人類が生きている基盤を学習する学問であり、本書はそのための基本的な事項を知ってほしいと考えて執筆したことが述べられている。また、高校「地学」を選択する生徒は、1.2%、日本人全員の100分の1しか高校できちんと地学を学んでいない現実を挙げている。だからこそ、この本の価値があると読んだ。教職課程においては、地学を含めた理科全般を履修することが義務付けられており、農大でも理科全般に強く、かつ専門領域が発揮できる教師養成を行っている。学生にも薦めたい本である。



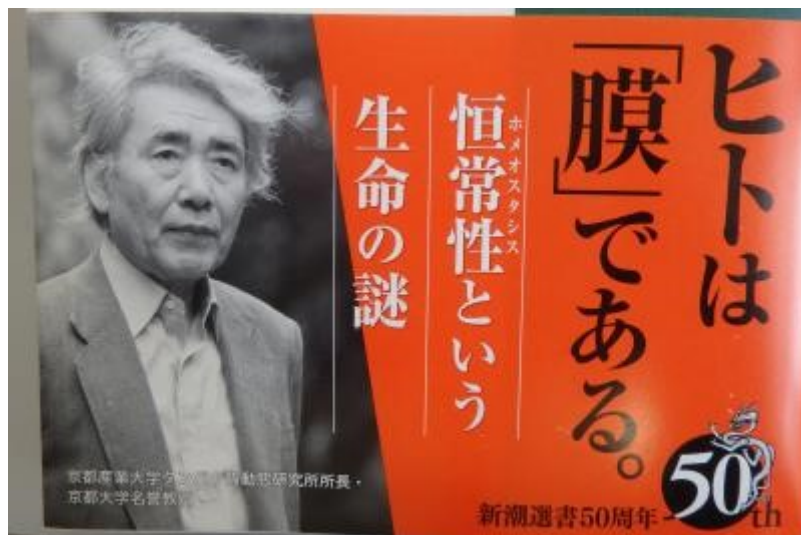
2017.03.12

ヒトは膜である

永田和宏著「生命の内と外」を読む機会があった。著者は、細胞生物学者・歌人でもある。「タンパク質の一生」(岩波新書)を読んだとき、インパクトがあったことを思い出して、この本を読み進んだ。

「生命の内と外」というタイトルが意図するところのものは、細胞膜を介した外部と内部の相互作用ということでもあるし、外部の変化に自らを開きつつ、しかもなお内部の統一性・恒常性を維持する生命の本質的な営みに注目することでもあった。そしてこれらに注目することは、「生命とは何か」について考えることに他ならないと、著者は述べている。

専門的な内容であるが、奥深い研究と新知見、随所にユーモアあふれる筆のタッチに思わず引き込まれた。



2017.03.10

リンゴ園の「猿害」から始まった餌付けの結果

和田一雄著「温泉ザル スノーモンキーの暮らし」を読むと、長野県志賀高原の地獄谷で露天風呂に入る野生ニホンザルは、リンゴ農家の「猿害」から始まった餌付けの結果であることが理解でき興味深かった。餌付けは1963年に成功したというから半世紀前である。餌付けに成功した直後の冬にある変化が起きた。サルに放ったリンゴが露天風呂の中に転がり込んだ。それを見ていた1匹(1才)がリンゴを拾ったことから温泉に入ることが始まったという。周囲で見えていた若いサルたちはしだいに露天風呂に入るきっかけとなった。それにしても、新しい習慣を作り出してそれになじむのは若い個体であるのは興味深い。これと似たようなことは、宮崎県幸島のイモあらいするニホンザルに見られたことを思い浮かべた。

この本は、これらのこと以外にも著者が半世紀にわたり取り組んだサルのフィールドワーク調査のことが紹介されているばかりでなく、ニホンザルと共存するための提言まで行っており、読みごたえのある内容であった。



2017.03.04

フードツーリズム

菊池俊夫著「フードツーリズムのすすめ」を読む機会があった。

フードツーリズムは、「食」に対する好奇心を満たすための移動。私たちがおいしいレストランを調べて、そのレストランにわざわざ足を運ぶことがフードツーリズムの原点であり、新鮮でおいしい野菜を求めて郊外の農産物直売所に足を運ぶこともフードツーリズムの原点であると著者は述べている。

このフードツーリズムには、食べることや食材を買うだけでなく、「食」の生産に関する体験や風景を見ることも含まれていることに同感した。

また、日本における雑煮、牛肉・豚肉、鮭・鰯の食文化に地域差があることを興味深く読み進めることができた。



2017.02.23

理系女子的生き方

今春、東京農業大学の志願者が増加しているという報道があった。この中には、女子学生も多く含まれているに違いない。

伊藤由佳理編著「研究するって面白い！」(岩波ジュニア新書)を読む機会があった。

この本の筆者たちは現在、中高校生のお母さんと同じくらいの年齢で、大学や公的研究機関で働いている理系の研究者です。しかし、もともと研究者を目指していた人ばかりはありません。文系だった人もいます。そんな人たちが、どのように進路を選び、研究者になったかという話や、現在の仕事について書いています。理系の研究者といっても、現在に至るまでの道は十人十色で、一人ひとりが異なる人生を歩んできたことがわかるでしょう(本文はじめにより)。

筆者は、すべて女性ばかりですが、研究という面では男女を問わず、これから研究者を志す人たちへのメッセージとなっています。

この本を読むと、高校までの理系・文系という分け方はあてにならないこと、1冊の本、1人の研究者との出会いなど、人生を方向づける選択肢の機会を活かすか否か、その時の決断がその後の生き方を変えていくことが伝わってくる。

これから農大入学を迎える皆さん、どのような出会いがあるのでしょうか。



2017.02.17

「生命とは何か」

生命科学者の福岡伸一著「生命科学の静かなる革命」がインターナショナル新書より創刊された。これまでに25人のノーベル賞受賞者を輩出してきたロックフェラー大学。かつて同校で研鑽を積んだ著者が、その歴史と先人たちの業績をたどりながら生命科学の道のりを描いている。ロックフェラー大学の現役研究者との対談を通して、著者が知りたかったことは2つあった。1つは「生命とは何か」という問いへの答え。2つ目の問いは「論文や教科書には書かれていない研究者たちの原体験やパーソナリティー」に関することであった。

優秀な科学者とは、大人になった今も若かりし日のみずみずしい探究心を大切に抱き続けていることが理解できた。

ノーベル賞受賞者の一人ウイーゼル（神経生物学者）の「生命とは何か」という問いへの答えは、生命を「バランスのとれた生活を送るためのコツ」みたいなものだと思います。生命には規律も必要ですが、新たな物事を積極的に受け入れることも必要です。この言葉に心惹かれるものがあった。



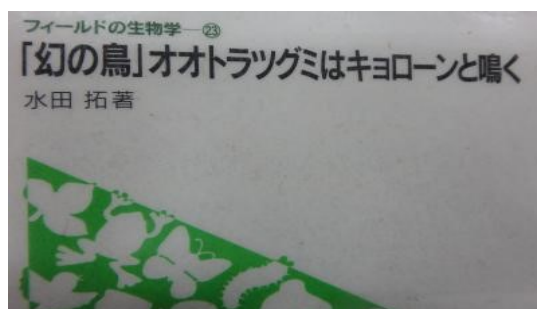
2017.02.13

ワクワク、ドキドキシリーズ

東海大学出版会から「フィールドの生物学」が刊行されている。最近23巻目が出版された（写真）。

この「フィールドの生物学」は、新進気鋭の研究者たちが自身の研究について熱く語る書籍のシリーズである（農大農学部のM教授も執筆されている）。毎度、読むたびにワクワク・ドキドキ感があるのは何故だろう。好奇心に満ち溢れた研究者が未知の世界に入り探検していくことに惹かれる。外国での調査、語学との戦い、キャリアパスの問題など、それでも前向きに研究していく姿に拍手。

功成り遂げた研究者の著書よりも、このような研究初期の若き研究者の著書から学ぶこと、考えさせることが多い。



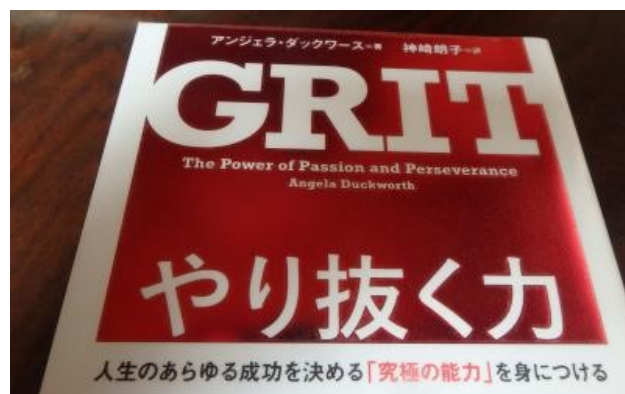
2017.02.03

やり抜く力

著者のアンジェラ・ダックワースは、ペンシルベニア大学心理学部教授。著書の中で、持っている力を十分に発揮するためには、「やり抜く力」がいかに重要かを説明している。何を成し遂げられるかは、全て「やり抜く力」にあると著者は問いかけている。

「やり抜く力」=情熱+粘り強さ。

大事なことは、内部から伸ばす方法を挙げている。また、課外活動は大いにすべきであることを奨励している。このことは、学生たちにも伝えておきたい気がする。この本を読んだ後に、学生時代には、大いに課外活動に励むべきであること、また、社会人になってからも課外活動が生きていくうえで重要な気がしてきた。



2017.02.01

ありがたい植物

著者は甲南大学教授の田中修氏。これまで、「植物はすごい」、「植物のあっぱれな生き方」などの著書があります。

この「ありがたい植物」には、日本人の健康を支える野菜・果物・マメの不思議な力のことが満載されています。

植物のありがたさを引き出すのは私たち人間の力。植物たちを栽培して収穫し、それらが

どのような成分をもち、それが私たちの健康にどのように役立つのかを明らかにしていくのは、私たち人間なのです、と冒頭で述べています。

読めば読むほど面白く、知識が増え、それが日常生活へと結びついていくので、役立つことも多い。農大生必携の図書である。お薦めしたい1冊の本である。身近な本から学ぶサイエンス。



2016.11.01

バーバラ・マクリントックの生涯

トウモロコシに動く遺伝子があることを見つけた女性研究者の記事を新聞紙上で読んだのは、今から33年前になる。その女性研究者である「バーバラ・マクリントックの生涯—動く遺伝子の発見—」(養賢堂, 2016)を読む機会があった。

マクリントックは、トウモロコシという窓から進化の生物学的法則を観察したノーベル賞学者である。トウモロコシの種子に見られる突然変異に関する観察研究は、転移性遺伝因子、別名「動く遺伝子」の発見につながった。この発見は、今日の遺伝子工学を築き上げる礎となっている。現在、マクリントックの「動く遺伝子」についての研究は、切断と再結合が起きるときの染色体に生じる一連の過程として認められている。女性研究者として生きてきた過程の中に、差別と偏見、無視と嫉妬、失意と絶望など、マクリントックが経験したこと、そしてそれらをどう乗り越えたのかを知ることができ、若い人たちが(特に女性)これからの人生を生きていくうえで考えさせられる本である。



2016.08.14

あなたは英語で戦えますか

ある本屋の書棚に日本のことを英語で紹介した本が並んでいた（写真1～3）。思わず、立ち止まってこれらの本を読み進んでいくうちに、これまでに知らなかったことや発見があった。

過日、鈴木孝夫著「あなたは英語で戦えますかー国際英語とは自分英語である」（富山房インターナショナル）を読み終えて、私たちは、もっと日本のことを知る必要性を考えた。90歳を超える鈴木氏の理論は、「まず足元を固めよ、日本のことを発信できる人間でなければ外国人とコミュニケーションができるわけがない」と明快に述べている。私たちが国際学会で発表するとき、内容があれば相手に伝わることを経験している。しかし懇親会の席上など、日本の文化のことを発信できればもっと会話がはずみ、相互理解が深まることを痛感することがある。

国際英語とは、自分英語であることを肝に銘じて、専門分野のみならず、日本のことも広く発信できるように努力していきたいと考えた。



2016.08.12

自然が答えを持っている

大村 智博士による近刊。ノーベル生理学・医学賞受賞講演ほかのエッセー集である。イベルメクチンを作り、約2億人の命を救った大村博士を育んだものは、山梨県・韮崎の小さな自然あふれる故郷と愛する芸術だった。

あらゆる問題やニーズに対する答えは、自然の中にある。大村博士が基礎研究にのぞむ哲学である。また、50年以上に及ぶ大村博士の研究手法は、茶の湯の大切な要素である「一期一会」という考えの影響を受けてきたという。以下、本文から。茶の湯は、日本文化の中で、尊重の精神を大切にする。そして、ある瞬間のある出来事は二度と起きないと考える。チャンスが現れたらそれをつかむことが大切だ。同時にすべての仲間、そして微生物に対する深い敬意を持っている。こうした感覚は、すべての優れた科学研究と発見の基礎となるべきものだ。教育と研究に関わる私たちにとって、実に含蓄ある言葉だ。考えさせる一冊の本であった。

